

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520537

研究課題名(和文) 日英語の構文に反映される主観的・客観的事態把握に関する認知言語学的研究

研究課題名(英文) A Cognitive Linguistic Study of Subjective/Objective Construal Involved in Grammatical Constructions in English and Japanese

研究代表者

堀田 優子 (Horita, Yuko)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：90303247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語と日本語の構文に反映される主観性・客観性的事態把握に関して、認知言語学的考察を行うものである。本研究は、まず、認知文法の提唱者であるLangackerや他の研究者が用いている「主観性・客観性」「主観的(客観的)事態把握」に関わる用語を整理し、定義し直した。また、英語の同族目的語構文や日英語の移動表現と虚構(主体的)移動表現を取り上げ、これらの構文研究を通して、「主観的(客観的)事態把握」の観点から、これまで明らかになっていない、それぞれの特異性に関して分析を行った。そして、これらの考察から、言語の主観性・客観性を捉える視点構図のあるべき方向性を探った。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explicate the characteristics of subjective/objective construal involved in grammatical constructions in English and Japanese. Here the notion 'subjectivity' is associated with Cognitive Grammar (see Langacker 1985, 1990), but the term 'subjectivity/objectivity' has been used in different ways. Thus, first, this study has arranged and redefined the terms like 'subjectivity/objectivity' and 'subjective/objective construal'. Then, by examining English cognate object constructions and motion expressions (including fictive (subjective) motion) in English and Japanese in terms of subjective/objective construal, the present study has clarified the peculiarities of these expressions, and furthermore, has explored the direction of the theory of 'subjectivity' (or viewing arrangement) to capture the association between subjective/objective construal and the grammatical constructions in language.

研究分野：英語学

キーワード：認知言語学 主観性・客観性 事態解釈 構文 グラウンディング

1. 研究開始当初の背景

英語や日本語の構文に反映される主観性・客観性の事態把握に関して、認知文法の提唱者である Langacker (1985, 1990) は、言語主体(話者)と記述対象である客体との関係を、観る側と観られる側の関係に置き換えて捉えた視点構図を用いて、「主観的事態把握」と「客観的事態把握」の2つのタイプを提案している。Langacker は、その説明の際、言語主体(話者)と記述対象である客体との関係を、観る側と観られる側の関係に置き換えて捉えた視点構図を用い、「主観的事態把握」は「客観的事態把握」からの、いわば、派生として扱っている。そこには、事態把握に関する類型論的な違いは考慮されていない。

しかしながら、「欧米の主要な言語では客観的事態把握を基本としており、日本語では主観的事態把握を基本としている」とする、事態把握の傾向の違いは、これまで多くの日本人研究者によって指摘されている。そして、Langacker の二つの視点構図のタイプは、日本人研究者による日本語の事態解釈の違いを反映させた研究へと進み、池上(2004, 2005)による「客観的把握」と「主観的把握」、中村(2004)の「Dモード」と「Iモード」に代表される認知モードの違いとして捉えられている。

一方、本研究代表者は、英語の結果構文や同族目的語構文に関する、これまでの自身の研究から、それぞれの構文の特異性について、認知的説明を与えただけでなく、周辺的・非典型的な用例も含めた動的なカテゴリー像を浮き彫りにしてきた。英語ではこれらの構文の生産性が高いが、日本語では対応する表現は限られている。

これまで、日本語が「主観的把握」を基本とすることを示す主観性の研究は多いが、同じ構文を取り上げた場合、片方の言語で適切な構文を欠く(あるいは制約が厳しい)事例の対照研究は、事態把握の面で両言語の相違点が多かった側面から明確になると考えられる。したがって、本研究において、日本語には対応する表現のほとんど見られない(あるいは大きく異なる)英語の構文表現を中心に取り上げ、個々の構文分析においてこれまで着目されてこなかった「主観性/客観性」の観点から現象を捉え直し、分析・再検討を行うことには意義があると考えられる。また、こうした日英比較を通して、言語の主観性・客観性を捉える視点構図のあるべき方向性を探ることを目指し、研究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究は、英語・日本語の構文に反映される主観性・客観性の事態把握に関して、以下の目的で、認知言語学的観点から考察を行う

ものである。

- (1) Langacker や他の研究者が用いている「主観性・客観性」「主観的(客観的)事態把握」の用語を整理し、定義し直す。
- (2) 日英語のいくつかの構文表現(英語の同族目的語構文や日英語の移動表現や虚構移動表現)に関して、「主観性・客観性」「主観的(客観的)事態把握」の観点から分析・再検討を行う。
- (3) これらの考察から、言語の主観性・客観性を捉える視点構図のあるべき方向性を見定める。

さらに、本研究で行う対照研究によって、事態把握の面で両言語の相違点が多くなり、ある同じ事態に対して、日英語の表現形式の有無や、形式上の違い、あるいは解釈の違いがどこから生じるのか、これまでの主観的・客観的事態把握に関する研究を援用しつつ、新たな枠組みを提示することを目指す。

3. 研究の方法

まずは、「主観性・客観性」や「主観的(客観的)事態把握」に関する先行研究を集め、研究者や理論によってばらつきが見られる関連用語や概念を整理し、その概念の再定義を試みる。

次に、研究対象とする日英語の構文のうち、新たに着目する構文(日英語の移動表現や虚構移動表現など)については、先行研究の洗い出しとその検証を行う。

さらに、日英語の対象構文(表現)の実例を集めるため、大型コーパス(British National Corpus や Corpus of Contemporary American English、日本語の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』など)や英訳されている日本語の小説、Web 検索等から、データを抽出し、データベース化する。その際、ネイティブのインフォーマントに適宜容認性や意味の違い等について意見を求め、確認する。

そうして集めた各構文のデータを基に、「主観性/客観性」の観点からの新たな分析を行う。

4. 研究成果

本研究では、日英語の様々な構文、特に、英語の同族目的語構文、日英語の移動表現や視覚表現にみられる虚構移動表現などについて、主観的・客観的事態把握、及び「グラウンディング」の観点からの認知言語学的分析を行った。

特に、これまでの同族目的語構文の研究ではあまり注意が払われてこなかった限定詞に着目し、グラウンディングの観点からその働きを見ることで、限定詞の意味(グラウン

ディング機能)が、同族目的語構文の解釈に重要な役割を果たしていることを示した。

認知文法では、英語の他動詞構文は、「一番際立つ参加者(トラジェクター)が主語であり、第二の際立ちが与えられた参加者(ランドマーク)が直接目的語である事態」を表すと考えられている。同族目的語構文の最大の特徴は、動詞の示す行為(完了プロセス)がモノ(thing)として認知的に捉え直され、それが目的語位置に組み込まれる点である。同族目的語構文の場合、現れる動詞の多くは、自動詞である。通常、自動詞によって表される事態は、主語の参加者にのみ、トラジェクターとしての際立ちが与えられる。そのため、目的語位置に生起する、同族目的語のランドマークとしての際立ち、動詞の意味から想定できるものではなく、何らかの形で別与えられる必要がある。したがって、話し手が同族名詞に修飾要素を加えることで、動詞の表す意味内容とは違った、ランドマークとしての際立ちが与えられることになると考えられる。

同族目的語構文では、様々な修飾語句のついた動詞派生名詞を目的語位置に置くことで、自動詞を副詞などで修飾するよりも、自由に、そして詳細に「行為」を記述することができる。すなわち、修飾語句を伴う同族目的語表現の使用目的は、動詞の意味にない新たな意味を名詞修飾の形式を用いて付与することにある。そうした同族目的語表現の使用目的と、不定冠詞によるグラウンディング機能(新たな指示対象に注意を向けさせる機能)は、聞き手に新情報を伝えるという意味では、矛盾なく合致しているといえる。(Höche (2009)によれば、BNCを中心に集めた同族目的語構文のデータ中、不定冠詞を伴う同族目的語が最も多く、次に、定冠詞を伴うものである。)

また、同族目的語にみられる定性表現の場合も決して例外的なものではなく、名詞類につき様々な限定詞のグラウンディング機能に沿って、「行為の特定のやり方」を同定することで、動詞と特定化された同族名詞の間に意味の差が生まれる。それによって、定性表現も同族目的語構文の目的語として現れることが可能となり、同族目的語構文全体の表現の多様性を生み出すことに繋がったと結論づけた。

さらに、先行研究では通常認められないとされてきた、同族名詞が限定詞だけでその他の修飾要素を伴わない用例を取り上げ、分析を試みた。(例: Bobby Lavender had *dressed the dress, walked the walk and talked the talk* of the black urban gangster. や They all *laughed that laugh* again. (BNCより)) こうした場合も、各限定詞のグラウンディング機能に沿って、文脈や共有知識等から同族目的語の指示対象を上手く選び出すことが

できれば、容認可能となることを明らかにした。

次に、移動表現や視覚的虚構移動表現については、日本語表現と英語表現では大きく異なる(例えば、The owl flew down from out of the hole in the tree. (Slobin 2008より))は、日本語では1つの動詞句では表せない。)これらの表現の多くの用例を得るため、日本語(原文)と英語(翻訳)で出版されている複数の小説を選び、そこに出てくる表現をデータベース化し、分析データの充実に図った。得られたデータから、上記の研究対象とする表現ごとに日英比較を行い、これらの表現に見られる特異性に関して、主観性・客観性の観点から説明を試みており、現在、成果の発表に向け、まとめている段階にある。

これまで取り上げてきた英語表現は、日本語では対応する形が大きく異なったり、ごく僅かしかなかったりするため、一方の言語で適切な構文を欠く事例の対照研究を通して、事態把握の面で両言語の相違点を明らかにすることが可能となった。こうした対照研究によって、言語の主観性・客観性を捉える一般的な視点構図のあるべき方向性を示し、視点構図に関わる言語の類型化に一定の貢献を果たすと思われ、今後も、継続して調査、研究を行っていきたいと考える。

以上の研究成果の一部については、以下の5に記載した通り、学会発表や論文執筆によって公表した。

<引用文献>

- Höche, Silke (2009) *Cognate Object Constructions in English: A Cognitive-Linguistic Account*, Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- 池上嘉彦 (2004・2005) 「言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標」, 山梨正明・辻幸夫・西村義樹(編)『認知言語学論考』No. 3 1-49, No. 4 1-60, 東京: ひつじ書房
- Langacker, Ronald W. (1985) "Observations and Speculations on Subjectivity," in J. Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 109-150, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」, 中村芳久(編)『認知文法論』3-51, 東京: 大修館書店.
- Slobin, Dan I. (2008) "Relations between Paths of Motion and Paths of Vision: A Crosslinguistic and Developmental Exploration," in Virginia C. Mueller Gathercole (Ed.), *Routes to Language: Studies in Honor of Melissa Bowerman*, 197-221, New York/London: Psychology Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

堀田優子「同族目的語構文の解釈とグラウンディング」*Kanazawa English Studies* 28 (KES 創刊 60 周年記念号) 金沢大学英文学会、査読無、pp.271-284、2012 年.

[学会発表](計 2 件)

堀田優子「グラウンディングの観点から見た英語構文」、金沢認知科学シンポジウム 2013 「ことばと認知 コミュニケーション行動の獲得と成立」、シンポジウム発表、金沢大学(石川県金沢市) 2013 年 3 月 7 日.

堀田優子「主観的・客観的事態把握と言語構造 認知言語学的アプローチ」、金沢大学人間社会研究域特定研究シンポジウム「ことばと認知: 言語・非言語コミュニケーション研究の現状と課題」、シンポジウム発表、金沢大学(石川県金沢市) 2012 年 2 月 20 日.

[図書](計 1 件)

堀田優子「同族目的語構文における限定詞の働きについて」、pp. 423-434、大庭幸男教授退職記念論文集刊行会編『言葉のしんそう(深層・真相) 大庭幸男教授退職記念論文集』、東京: 英宝社、2015 年.

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀田 優子 (HORITA, Yuko)
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号: 90303247

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: